

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 18 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780399

研究課題名(和文) 被排斥者への共感プロセスにおける心理的痛みの伝染と制御

研究課題名(英文) Empathy for excluded individuals: its mechanism and regulation

研究代表者

中島 健一郎(Nakashima, Kenichiro)

広島大学・教育学研究科(研究院)・講師

研究者番号：20587480

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、被排斥者に共感を示すことによって、被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するかどうか、そして仮に心理的痛みが伝染する場合、その痛みをどのように制御すれば良いのが明らかにすることを目的とした実験的検討を行った。主な知見として、(1)被排斥者へ共感により心理的痛みの伝染が生じる、(2)そのネガティブな影響を抑えるためには、共感する側の個人が精神的に安定していることが必要である、(3)共感それ自体の正確性に関して言えば、社会経済的地位の低い個人ほど被排斥者の心理的痛みを正確に推測できることが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to answer the following two research questions. (1) Does empathy cause psychic injury to the empathizer, particularly when they empathize with individuals experiencing social pain? (2) What individual factors regulate maladaptive responses to such vicarious ostracism? The main findings of my experimental studies were that (1) empathy for excluded individuals leads to vicarious social pain, (2) low levels of the need to belong and high levels of well-being lowered empathizers' maladaptive responses, and (3) empathizers with low socioeconomic status (SES) more accurately identified the target individual's negative feelings and psychological pain than those with high SES. The finding implied that high SES has negative effects on interpersonal relationships.

研究分野：社会心理学・教育心理学

キーワード：共感 社会的排斥 心理的痛み

1. 研究開始当初の背景

現状の保育者養成では、保育者が子どもの存在を受け止め、子どもの心持ちを感じ取ることが重要視されている(岩立, 2007)。しかし、子どものさまざまな心のありようを共に感じようとするのが、保育者自身を苦しめることになるかもしれない。具体的には、人とかかわりの中で傷ついたり子どもに共感を示すことによって、保育者もまた心に傷を負っている可能性がある。このような心の傷の“連鎖”は実際に存在するのであろうか。本研究は、この問いを出発点とした上で、(1)被排斥者に共感を示すことによって、被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するかどうか、そして(2)伝染した心理的痛みをどのように制御すれば良いのか、さらに(3)どのような個人が被排斥者の心の傷を正確に推測することができるのか明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究では上述した3点を主目的とした検討を実施した。なお、以下の(1)等の表記は、3. 研究の方法や4. 研究成果の(1)等の表記と対応している。

(1)被排斥者への共感による心理的痛みの伝染について

先行研究では、身体的痛みを感じている他者だけではなく、排斥された他者を観察した際に、観察した側に心理的な痛みが生じることが示されている(i.e., vicarious social pain: Wesselmann, Williams, & Hales, 2013)。さらに、他の研究では、友人が排斥された様子を観察した場合と、見知らぬ他者が排斥された様子を観察した場合の脳活動が異なること、さらに、友人の場合に賦活する脳部位は本人が排斥された場合の脳部位と同じであることが示されている(Meyer et al., 2013)。以上の点を踏まえれば、被排斥者との関係性によってその神経基盤は異なるものの、被排斥者への共感による心理的痛みの伝染が生じることは十分に想定されうる。この点について確認すること目的とした検討を実施した。

(2)伝染した心理的痛みの制御について

被排斥者に対して共感を示すことによって、共感する側の個人もまた心に傷を負っているのだとすれば、共感する側の個人が心の痛みに伴う不適応反応を示す可能性がある。この点については、4の(1)で報告した研究によって衝動性や回避動機が高まることが明らかにされている。

この研究では、伝染した心理的痛みと衝動性や回避動機といった不適応反応との関係を、共感する側の個人が知覚したネガティブ感情が媒介することが示されている。この媒介過程を考慮すれば、共感する側の不適応反応を抑えるためには、ネガティブ感情の高まりを抑える要因について同定する必要がある。そこで、先行研究(e.g., Gadassi et al., 2011;

Knowles & Gardner, 2008; Yanagisawa et al., 2011; Oishi, 2012)の知見に基づき、いくつかの個人特性・傾向に着目した検討を実施することとした。

(3)排斥場面を題材とした共感の正確性について

被排斥者への共感に着目した場合、被排斥者の心理的痛みが共感する側の個人に伝染するか、という両者の対応関係だけではなく、被排斥者の心理的痛みを正確に推測することができるか、という共感の正確性に関する検討も必要であろう。なぜなら、共感の正確性が高い個人ほど、対人関係上の恩恵があり、社会への適応が促されることが指摘されているためである(Côté & Miners, 2006)。被排斥者への共感に関しても、それが正確であるほど適切なかかわりが実行できると想定される。その点において、この文脈でどのような個人が正確に共感することができるのか、それを明らかにすることは、共感と対人関係に関する理解を深めるためにも、そして教育現場への応用を目指すためにも重要である。そこで、先行研究(e.g., Kraus et al., 2010; Kraus et al., 2011; Kraus et al., 2012)の知見に基づき、社会経済的地位に着目した検討を実施することとした。

3. 研究の方法

(1)共感を題材とした先行研究には、実験刺激が単純化しすぎており、日常生活での共感プロセスとの解離が生じているという問題点があるとの指摘がなされている(Zaki & Ochsner, 2009; 2012)。そこで本研究では、実際の会話場面を録画・編集したものを実験刺激として用いた上で検討することとした。実験手続の詳細については、中島(2014; 雑誌論文 6)ならびに中島(2015: 学会発表 2)・中島(2015: 学会発表 1)に記載されている。

(2)(1)の実験参加者である女子短期大学生 73名は、実験リクルーティング用の調査に回答している。その中に、個人要因を測定するための心理尺度を組み込んだ。具体的には、集団同一視尺度(Karasawa, 1991)・特性自尊心尺度(山本他, 1982)・一般的信頼尺度(山岸, 1998)・所属欲求尺度(小林他, 2006)・充実感尺度(大野, 1984)・Todai Health Index(THI; Suzuki et al., 1991)の6つであった。なお、THIは抑うつ傾向を測定する尺度であり、その他手続の詳細については中島(2015: 学会発表 5)に記載されている。

(3)保育者養成校に所属する女子短期大学生 77名を対象とした集団実験を実施した。(2)と同様に、実験リクルーティング用の質問紙に、社会経済的地位に関する尺度(Nakashima & Yanagisawa, 2015: 雑誌論文 5)を組み込んだ。その他、実験手続の詳細はNakashima & Lee (in press: 図書 1)ならびに中島(2015: 学会発表 4)に掲載されている。

4. 研究成果

(1)保育者養成校に所属する女子短期大学生73名を対象に、目的変数を知覚した心理的痛み、説明変数を推測した共感対象の心理的痛み(受容・排斥場面両方)、推測した共感対象のネガティブ感情とする重回帰分析を実施した。分析の結果、排斥場面における推測した心理的痛みが共感者の知覚した心理的痛みに影響を及ぼすことが示された($b = .32, t(69) = 1.94, p = .06$)。他の説明変数の影響は認められなかった。これらの結果は、共感に伴う心理的痛みの伝染を示唆している。

次いで、知覚した心理的痛みが共感者の感情・行動傾性に及ぼす影響について検討するために、衝動性や接近回避動機に着目した媒介分析を行った。その結果、共感者が知覚した心理的痛みは、ネガティブ感情を介して衝動性を高めるとともに、回避動機を強めることが示された(Figure 1)。なお、接近動機に関してはネガティブ感情の影響のみ確認された($b = -.47, t(70) = 2.81, p = .01$)。

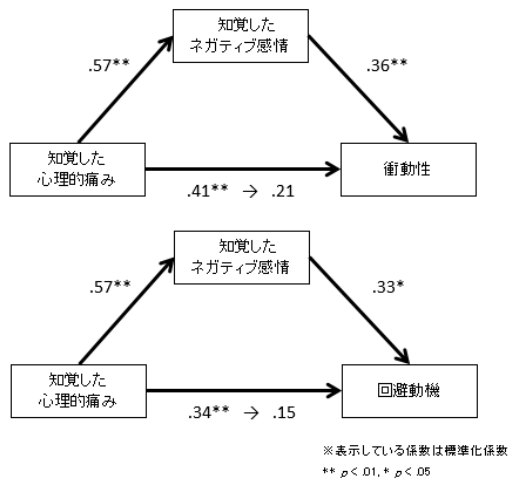


Figure 1 知覚したネガティブ感情の媒介効果

以上より、被排斥者へ共感することによって共感する側の個人が心理的痛みを感じることで、そしてネガティブ感情を介して不適応行動が生じることが示された。これは本研究の主要な知見と言える。以下では、一連のプロセスの精緻化を目指し、調整要因として次の2つに着目した検討を実施する。

(1)-1 所属欲求に着目した検討

Nordgren et al. (2011)や Ruben and Hall (2013)は、共感する側の個人がその対象と類似した心的状態にあるときに共感プロセスが促進される可能性を示唆している。もしこれが正しいのであれば、共感する側が慢性的に心理的痛みを抱えている、あるいは心理的痛みによる基本的欲求の強まりを感じている場合に、上述した伝染プロセスが顕著に生じることが予測される。そこで、共感する側の個人の所属欲求に着目した検討を行った。

保育者養成校に所属する女子短期大学生73名を対象に、目的変数を実験参加者が知覚した心理的痛み、説明変数としてステップ1

に被排斥者の推測した心理的痛み(中心化)と実験参加者の所属欲求(中心化)を、ステップ2にそれらの交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、推測した心理的痛み($b=0.39, t(73)=3.53, p<.05$)と所属欲求($b=0.47, t(73)=2.55, p<.05$)の主効果に加えて、交互作用が有意であった($b=0.46, t(73)=2.46, p<.05$)。単純傾斜の検定を行った結果、所属欲求高群(+1SD)において推測した心理的痛みと知覚した心理的痛みに正の関連が認められた($b=0.66, t(73)=3.78, p<.05$)。一方、所属欲求低群(-1SD)では有意な関連は認められなかった($b=0.12, t(73)=0.91, ns.$)。この結果は先の予測を支持する結果であり、共感する側の所属欲求の強さが心理的痛みの伝染を調整することを示している。

(1)-2 共感スタイルの違いに着目した検討

共感スタイルの違いとして、他者に共感を示す際に、自分のことに置き換えてその他者を理解しようとする emotion sharing と、あくまで第三者の立場から状況を把握し、その中で他者を理解しようとする mentalizing という2つがあげられる(Masten et al., 2013; Zaki & Ochsner, 2012)。自分に置き得ようとする emotion sharing を用いる個人において、心理的痛みの伝染が顕著に生じることが予測される。

保育者養成校に所属する女子短期大学生99名を対象に、観察場面の種類(受容/排斥)の1要因参加者間デザインを用いた集団実験を実施した。共感スタイルの違い(emotion sharing が33名、mentalizing が66名)に基づき、説明変数を条件、共感スタイル(いずれもカテゴリカル変数としてコード化)、推測した心理的痛み(中心化)とし、目的変数を実験者自身が知覚した心理的痛みとする階層的重回帰分析を行った。

その結果、ステップ3のモデルが有意であり、3要因交互作用が認められた($b=-0.77, t(89)=2.19, p<.05$)。単純傾斜の検定の結果、排斥条件/emotion sharing 群においてのみ、推測した心理的痛みと知覚した心理的痛みに正の関連が認められた($b=0.87, t(89)=5.14, p<.05$; Figure 2)。これは予測を支持する結果である。心理的痛みの伝染は状況(受容/排斥)や共感スタイル(emotion sharing/mentalizing)の違いに依存して生じると考えられる。

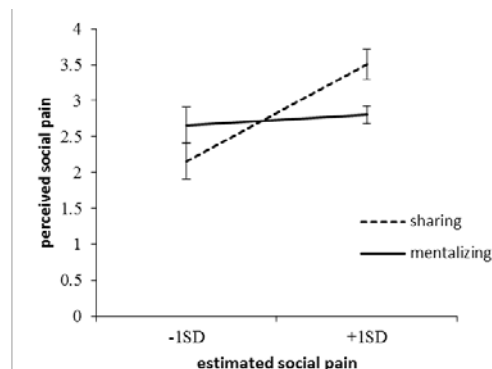


Figure2 排斥場面における emotion sharing の効果

(2) リクルーティング調査時に測定した個人特性・傾向に関する尺度得点と、共感する側の個人すなわち実験参加者が知覚したネガティブ感情との相関パターンを考慮した上で、目的変数を知覚したネガティブ感情、説明変数を集団同一視、一般的信頼、所属欲求、充実感、THIの平均得点とする重回帰分析を実施した。分析の結果、充実感がネガティブ感情を低めることが示された(Table 1)。伝染した心理的痛みによる不適応反応を抑えるためには、共感する側の充実感が重要な意味を持つと考えられる。

Table1 知覚したネガティブ感情に対する個人特性・傾向の影響

変数名	ネガティブ感情(β)	CI(95%下限)	CI(95%上限)	VIF
集団同一視	.03	-0.226	0.291	2.17
一般的信頼	.12	-0.127	0.367	1.54
所属欲求	.03	-0.194	0.259	1.24
充実感	-.47 **	-0.741	-0.196	3.12
THI	.21	-0.058	0.488	2.17
R^2	.33 **			

** $p < .01$

一方で、伝染した心理的痛み、ネガティブ感情、そして不適応反応の媒介プロセスの中で、伝染した心理的痛みを抑えることの有効性を主張する立場もあると想定される。心理的痛みが低ければ、それに応じてネガティブ感情も低く、結果として不適応反応への傾性も弱まるためである。そこで、この観点からも個人特性・傾向の影響について検討することとした。伝染した心理的痛みに及ぼす影響についての検討である。

同様の説明変数を用いた上で、目的変数を伝染した心理的痛みとする重回帰分析を実施した。分析の結果、所属欲求が伝染した心理的痛みを強めることが示された(Table 2)。先の分析結果と併せて考慮すれば、所属欲求の低さと充実感の高さが共感する側の個人の不適応反応を抑えることが示された。彼ら彼女らが平素から精神的健康を保っていることが重要であることが示唆される。

Table2 伝染した心理的痛みに対する個人特性・傾向の影響

変数名	心理的痛み(β)	CI(95%下限)	CI(95%上限)	VIF
集団同一視	.21	-0.060	0.470	2.17
一般的信頼	-.05	-0.316	0.215	1.54
所属欲求	.32 **	0.067	0.578	1.24
充実感	-.16	-0.481	0.169	3.12
THI	.20	-0.131	0.528	2.17
R^2	.23 **			

** $p < .01$

(3) 先行研究(e.g., Kraus et al., 2010; Kraus et al., 2011; Kraus et al., 2012)では、社会経済的地位が低い個人ほど共感の正確性が高いことが示されている。この知見に基づき、社会経済的地位の主効果が生じると予測した。さらに、社会経済的地位の低い個人は社会環境へ適応するための手段として、一般的信頼感の高さや向社会的行動の選択、そして共感の正確性の高さがが必要になるとの指摘があること(e.g., Kraus et al., 2012; Piff et al., 2010; Stinson & Ickes, 1992)を考慮すれば、周囲の他者にとっての対人関係上の危機は自身にとっての潜在的な脅威となるがゆえに、社会経済的地位が低い個人はその状況において共感の正確性が高まることが予測される。すなわち、社会経済的地位と共感対象が置かれた状況との交互作用が生じると予測される。

以上の予測を検証するために、共感の正確性の指標として差得点を用いた単回帰分析を実施した。なお、この差得点は実験参加者の推測した心理的痛みを、共感対象が実際に知覚した心理的痛みから減算することで算出されている。同一尺度(FPS: 飯村他, 2002)を用いているために比較可能な形になっている。得点が高いほど、実験参加者の過大推測を、得点が低いほど過小推測を示しており、得点がゼロの場合に両者の回答が完全に一致していることを指す。

まず、排斥場面での心理的痛みの差得点を目的変数、主成分分析による社会経済的地位の合成変数(Nakashima & Yanagisawa, 2015; 雑誌論文 5)を説明変数とする単回帰分析を行った結果、社会経済的地位の有意な効果が認められた($b=0.39, t(74)=2.52, p=.01$)。Figure 3 が示すように、社会経済的地位が高くなるにつれて過大推測を示すことが明らかになった。一方、受容場面における心理的痛みの差得点を目的変数に用いたところ、有意な効果は得られなかった($b=0.10, t(74)=0.80, ns.$)。これらは先の交互作用に関する予測を支持する結果だと解釈される。

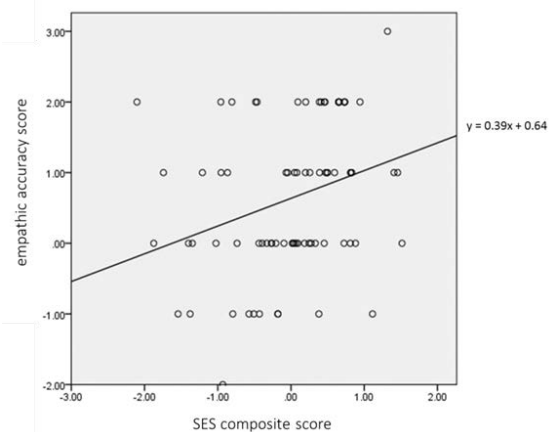


Figure3 排斥場面における共感の正確性に対する社会経済的地位の効果

次に、排斥場面におけるネガティブ感情の正確性(柳澤(2011)の尺度を援用)を目的変数とし、社会経済的地位を説明変数とする単回帰分析を行った結果、社会経済的地位の有意な効果が認められた($b=0.15, t(74)=2.01, p<.05$)。心理的痛みの場合と同様に、社会経済的地位が高いほど過大推測をすることが示された(Figure 4)。なお、受容場面では実験の都合上、共感対象のネガティブ感情を推測しよう求めているため、心理的痛みの場合と同じ分析を実施することができない。

以上の結果は、先行研究(e.g., Kraus et al., 2010; Kraus et al., 2011; Kraus et al., 2012)の知見を支持する方向の結果である。社会経済的地位が低い個人ほど共感の正確性が高いことを示唆している。しかし、その傾向は特定の状況、すなわち周囲の他者が対人関係上の危機に晒されている場合に特化しているこ

とが示唆される。この点に加えて、社会経済的地位が高いほど心理的痛みやネガティブ感情を過大推測していることが明らかになった点において、この研究の意義は大きいと考えられる。

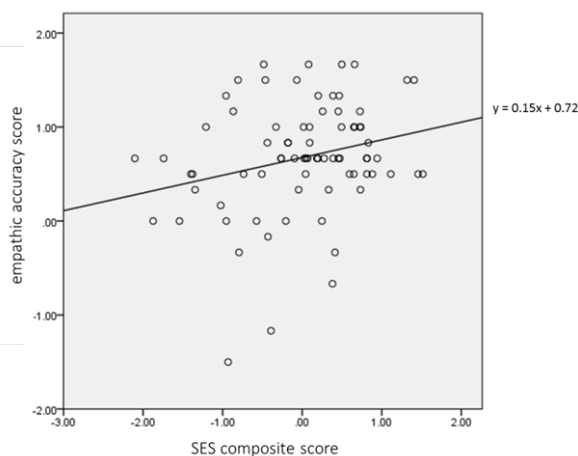


Figure4 排斥場面における共感の正確性に対する社会経済的地位の効果

以上3点の観点からの検討により、主な知見として(1)被排斥者へ共感を示すことにより、共感する側の個人に心理的痛みが生じる、(2)このような心理的痛みの伝染によるネガティブな影響を抑えるためには、共感する側の個人が精神的に安定していることが必要である、(3)共感それ自体の正確性に関して言えば、共感する側の個人の社会経済的地位の低さが鍵となることが明らかにされた。

共感が保育者や教員養成、そして対人援助職の養成において重要な位置づけにあること(岩立, 2007)を考慮すれば、本研究には共感研究の包括的理解に資するという理論的意義だけではなく、養成校での授業・演習の在り方に対する示唆を与えるという実践的意義があると言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

1. 古川善也・中島健一郎・森永康子 (印刷中). 罪悪感が被害者への補償行動に及ぼす影響: 三者関係における資源分配パラダイムによる検討, *社会心理学研究*. (査読有)
2. 清水陽香・中島健一郎・森永康子 (2016). 対人的文脈における防衛的悲観主義の役割: 初対面の複数の他者への行動意図に着目して, *パーソナリティ研究*, 24(3), 202-214. (査読有)
<http://doi.org/10.2132/personality.24.202>
3. Furukawa, Y., Nakashima, K., & Morinaga, Y. (2016). Influence of social context on the relationship between guilt and prosocial

behaviour. *Asian Journal of Social Psychology*, 19(1), 49-54. (査読有) DOI: 10.1111/ajsp.12128

4. Nakazato, N., Nakashima, K., & Morinaga, Y. (in press). The importance of freedom in the East and the West over time: A meta-analytic study of predictors of well-being. *Social Indicators Research*, 1-18. (査読有)
DOI: 10.1007/s11205-015-1180-6
5. Nakashima, K. & Yanagisawa, K. (2015). Subjective socioeconomic status and departmental identity interact to reduce depressive tendencies and negative affective responding for female undergraduates. *Japanese Psychological Research*, 57(2), 113-125. (査読有) DOI: 10.1111/jpr.12070
6. 中島健一郎 (2014). 被排斥者への共感による心理的痛みの伝染についての実験的検討, *発達研究*, 第28巻, 117-129. (査読無)
7. 中島健一郎・磯部智加衣・相馬敏彦・浦光博 (2013). 集団アイデンティティの変動過程における集団タイプの調整効果, *心理学研究*, 84(2), pp.162-168. (査読有) <http://doi.org/10.4992/jpsy.84.162>
8. 中島健一郎 (2013). 被排斥者への共感による心理的痛みの伝染 (中間報告), *発達研究*, 27, 189-194. (査読無)

〔学会発表〕(計17件)

1. 中島健一郎 (2015). 被排斥者への共感に伴う対人行動の変容: emotion sharing と mentalizing の違いに着目して, 日本社会心理学会第56回大会, 2015年10月31日, 東京女子大学(東京都杉並区)
2. 中島健一郎 (2015). 共感による心理的痛みの伝染過程における所属欲求の調整効果, 日本グループ・ダイナミクス学会第62回大会, 2015年10月12日, 奈良大学(奈良県奈良市)
3. Nakashima, K. (2015). Social pain contagion and empathic accuracy. 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2015年2月28日, California (USA).
4. 中島健一郎 (2015). 社会経済的地位が低い人ほど排斥された他者の気持ちが分かる: 共感の正確性に対する個人差要因の影響, 日本グループ・ダイナミクス学会第61回大会, 2014年9月6日, 東洋大学(東京都文京区)
5. 中島健一郎 (2015). 伝染した心理的痛みと不適応反応に対する感情の媒介効果, 日本社会心理学会第55回大会, 2014年7月26日, 北海道大学(北海道札幌市)
6. 中島健一郎 (2014). “今が良い”からこそ心が痛む: 集団アイデンティティが future-alone 操作後の痛み関連反応に及ぼす影響, 日本心理学会第77回大会,

2013年9月20日, 札幌コンペンション
センター(北海道札幌市)

〔図書〕(計3件)

1. Nakashima, K. & Lee, S. (in press).
Benefits and pitfalls of high economic status
based on three findings in Japanese samples,
Socioeconomic status: Influences,
disparities and current issues, New York:
NOVA Science Publishers.
2. Tasaki, Y., Nakashima, K. (double-first) &
Ura, M. (in press). Who seeks relationships
with Dark Triad individuals and how?
Focusing on socioeconomic status and trait
self-control, Socioeconomic status:
Influences, disparities and current issues,
New York: NOVA Science Publishers.
3. Nakashima, K. (2014). Chapter14 Who uses
ingroup identification and favoritism for
buffering threats to self-esteem, and when
do they use it? In J. H. Borders (Ed.),
Handbook on the Psychology of
Self-Esteem (pp. 251-276), New York:
NOVA Science Publishers.

6. 研究組織

(1)研究代表者

中島 健一郎 (NAKASHIMA KENICHIRO)

広島大学・大学院教育学研究科・講師

研究者番号：20587480